

4 成果と課題

(1) 成果

実践事例1では、「形や色などによるコミュニケーション」に視点を当てつつ、導入段階で素材の鑑賞を取り入れた「言語活動の充実を図る」ための授業の工夫が図られた。具体的には、身近にある木の実や葉、枝などを使い、「短冊に自分の感じたイメージや素材から感じ取った様子を書いていく」活動が試みられた。ここでは、じっくりと素材感を味わい、そこから「感じ取ったことや考えたこと」を黒板に掲示された短冊の言葉から、児童が相互に共有することで多様な価値や表現に気付き、自他理解が深まることが明らかとなった。また、友達との意見交換は、児童の作品づくりの発想を広げ、多様な素材を組み合わせられるようになり、表現の力も高めることに発展した。すなわち、よさや美しさを鑑賞する喜びを味わいながら、鑑賞の授業が自己の作品づくりの手助けになると、児童が自ら感じられるようになるための「指導の工夫」の一例が示された。

実践事例2では、「友達の作品から物語を想像して表現する」などの工夫次第で、鑑賞の授業での言語活動を楽しんでいる児童は増加することが明らかとなった。具体的には、本事例では国語科での学習を生かして実践されたが、本教科において「話すこと」「書くこと」といった言語活動が、多くの児童の意欲をかき立てることを可能とした点である。加えて、「作品を通した子どもたちの交流の場」としての本授業は、活発な話し合いの成立によって、自己肯定感を生み、授業を通したクラスの仲間づくりにつながったとある。その背景には、ほとんどの児童が「自分の作品をほめられてうれしいと感じる」という調査結果からうかがえる。こうした成果は、学級に活力を生み、やがては学校全体の活性化につながるものと期待できる。だが、そのためには、他の教科・領域と連携しながら実施していくことの重要性が示されたように、小学校においては、教科横断的な工夫と計画的・継続的に繰り返すことによってこそ、児童の学びが高まることが確認された。

これらの事例にあるとおり、表現と鑑賞を一体化した指導は、「言語活動の充実を図る」上で展開の多様性に富み、本教科において求められる資質や能力を高めることに有効であることが証明された。本研究により、「モデルプラン」の例示と、来年度の研究に役立つだろう貴重な基礎データが収集され、目標は達成された。

(2) 課題

実践事例1では、本教科における授業の「言語活動」を、児童は会話の延長として受け止めてしまう傾向があると指摘している。したがって、話し合いの中から発想を広げるためのヒントを見つけたり、友達の作品のよさを見つけたりするよう指導を工夫していく必要がある。これなしに、「感じ取ったことや考えたこと」を自分の表現に生かせるようにはならない。

実践事例2では、話し合いは楽しいが、自分の考えたことを文章に書き表すことに、抵抗を感じている児童がいることも見逃せないと指摘している。「何を書いていいのかわからない」「書き方がわからない」という児童への対応として、各教科が連携し、教科の特質を生かしながら言語に関する能力を高めるための指導を補完し合うことが必要であろう。

今年度の研究では、新学習指導要領に新しく加わった〔共通事項〕について詳しく触れていない。また、研究対象となった協力校の児童が、どのような発達の段階にあるのかについて、十分な検討や確認がなされていなかった。ゆえに、次年度の研究の方向性としては、このことを踏まえた研究を深める必要があり、課題となる。また、アンケート調査結果を因子分析の手法を導入して考察していく予定もあったが、調査対象の総数が少なく、正確な判定が行えなかった。次年度、機会があれば、実現したい。